

アクセント資料としての謡曲譜本の意義

添田, 建治郎
九州大学大学院博士課程

<https://doi.org/10.15017/12172>

出版情報 : 語文研究. 34, pp. 52-64, 1972-12-20. 九州大学国語国文学会
バージョン :
権利関係 :



アクセント資料としての

謡曲譜本の意義

添田 建治郎

(一) はじめに

謡曲譜本中にみえている諸々の節付きの類を近世初頭の狹義の国語音韻資料として紹介し、利用する試みは、これまでも少なからず行なわれてきている。「謡曲(觀世梅若流)の發音法に就いて」(『音聲の研究』第一輯)、「謡曲發音雜記」(『音聲學會會報』第77号)などでの石黒魯平氏の報告、佐伯功介氏の「謡ひの發音(寶生流)に就いて」(『音聲の研究』第一輯)、大西雅雄氏の「謡曲の謡い方とその音声学的特質」(『音聲の研究』第八輯)があり、比較的新しいところでは、和田實氏の「諸本の表記について」(上)、「同(中)」、「同(下)」(それぞれ『国文論叢』第3、6、7号)などを挙げることができるが、筆者の当面の課題である「謡曲の旋律とアクセント」に関する報告としては、金田一春彦氏の「邦楽の旋律と歌詞のアクセント」(『田邊先生遷曆記念東亜音楽論叢』)があり、更に謡曲譜本それ自体の具体的な内部徴証からの考察に及んだものと考えるとすれば、藤田弘子氏の「戀詞のアクセ

ント調査——謡曲の胡麻點を用いた試み——」(『國語國文』第26卷第9號)が僅かに挙げられる許である。その他にも前田富祺氏の「能楽論におけるアクセント觀」(『国語学研究』第5号)、それに桜井茂治氏の「世阿弥の能楽書とアクセント——室町時代のアクセント資料として——」(『國學院雜誌』昭和40年2、3月合併号)があるが、是ら両氏の論文は、謡曲作曲者が現実のアクセントについても留意して作曲し、伝承を試みた、という経緯を、能楽書の若干の記述を引いて説明し、それによつて謡曲の旋律の上に当時の現実の京阪アクセントが反映したであろうという立論をなすものであったが、何れも、謡曲譜本それ自体の内部徴証に基づいて導き出された結論というわけではなかった。かゝる制約はありながら、謡曲の旋律の上に反映した現実のアクセントについて前田氏は、

実際の謡曲がどの程度アクセント資料として役に立つかは今後に残された大きな問題であろう。見通しとしては六、七割程度ではないかと考えている。(同氏「前掲論文」40頁、下段12、14行)

と述べられ、今後の課題として、

掛詞をどう扱うか、曲調を主とした「胡麻譜」をどうするか、作曲者の節づけが伝承の途中で変わることはないか、作曲者による相違はないか、同じ曲中でも部分による相違はないかなど、なお考慮すべき問題は多い。

(同氏「前掲論文」40頁、下段18〜21行)

との見解を明きらかにされた。氏の指摘を更に謡曲譜本の具体的な内部徴証によって確認し、若干の訂正を行なうことによって厳密を期することが、藤田氏における先述の調査の一つの踏むべきステップであつたかと思う。

筆者は今、藤田氏のこの方面での結論と目される、

「アクセントを無視した胡麻點」と「アクセントを反映している胡麻點とは今のところ、そのあらわれ方に明らかな規則性というものが認められず、数々の問題点を残したまま、懸詞のアクセント調査の対象としては、謡曲のどの部分に位置する胡麻點も一律に取り扱わざるを得ぬ結果となつてしまつたが、大體、次のようなことが言えよう。即ち

(1) 現行謡曲で拍子に合う部分(合わぬ部分よりも)

(2) ハル、下等の節のあるところ(無いところよりも)

(3) 文の中(最初の部分よりも)

に於てはアクセントが無視される傾向にある、と思われる。

(同氏「前掲論文」4頁、上段10〜19行)

について、具体的に例を取り上げて詳細な検討を加え、「謡曲の旋律とアクセント」に関する筆者の見解を明きらかにすることとしたい。調査の対象とする資料は、近世初頭の譜本と伝えられる日本古典全集刊行會板の「光悦本謡曲百番」である。これは藤田氏の調査でも取り上げられた資料の一つでもあり、近世初頭の謡曲旋律の概要を把握することができるものと考へる。

(一) アクセント資料としての吟味

謡曲譜本(現行謡曲の場合はさておき)に施された胡麻譜の中、平胡麻(直胡麻)が近世(註)現代京阪語における高いアクセントに、下胡麻が低いアクセントに対応していることについては、古く能楽書「毛端私珍抄」などの記述や、金田一氏の前掲論文中での指摘によって言われ筆者の若干の内部徴証によつても確認されることである。その他に「」なる、高から中への旋律の変化をみせる複合胡麻譜(廻す節)とでもいふべき低音のものがある。問題は、是らの胡麻譜などによつて謡曲の旋律の上に反映していると目されるアクセントの状態が決して一様ではなく、かなりの精度をもつて現実のアクセントを正しく反映しているとみられる部分と、音楽的旋律を専らにして現実のアクセントについては無視し、乱れの特に著しい部分との二つが両極にみられるのではないかという点にある。このことから、謡曲譜本をアクセント資料の一つとして活用する際に、それでは譜本中の特定の限られた部分に現実のアクセントを特に反映するような傾向が見出せないものか、見出せば、その部分によつて近世京阪アクセントを語ることができるのではないかと思ふのである。その場合に、謡曲の旋律の上に現実のアクセントがどの程度正確に反映しているかについての指標として、

① 謡曲の旋律の上に反映しているアクセントは、『補忘記』「平曲」などにあらわれる近世初頭の京阪語のアクセント体系と比べた場合、同様の傾向を示すか否か。

② アクセント資料としての等質性を測る上で、再び、三度と

繰り返しあらわれてくる同一の表現内容について、その施されていく胡麻譜に一定性がみられるか否か。

の二点があり、両者についていかなる結果を示すかという事が関心事となってくる。更には、それぞれをその他のアクセント資料の場合の結果と比較することによって、資料としての信頼度を測ることが容易になると思われる。以下①、②に関する調査結果の報告と、それに基づく帰納を行なうこととする。

まずは①について行なう。謡曲譜本中の各語彙のうち、「観智院本類聚名義抄」、「四座講式」、「補忘記」などに取められた、規範的なアクセントを示す語彙との比較対照の可能なものについては、それによって譜本中の各語彙に施されている胡麻譜が、現実のアクセントを反映したものであるか否かを検討し、また、是までも既に明らかにされている、二音節名詞第三類の第二類への合併などの、「四座講式」以後にアクセント変化を遂げた語彙については、「補忘記」及び奥村三雄氏の調査になる。「平曲」譜本のアクセント体系によって確認することとしたのである。節まわし(曲節)の種類のできる限り多彩なものを採るといふことから、高砂・田村、羽衣、船弁慶、八島、熊野、當麻の七曲を主たる調査の対象とし、用例数の極端に少ない節まわしについては、一、二の曲について更に追加して調査を行ない、全体の傾向の反映と認めたものである。但し、「上カ、ル、上同、上地、下キリ、下同」などの特殊な節まわしの指示のある部分については、別に論ずることとして今は省き、カ、ルならばカ、ル、次第ならば次第と専ら指示のあるものを取り上げている。さて、資料1に掲げた「正」とは、

今(熊野、第三、193 べ、上段 14 行)

今イマ(「観智院本類聚名義抄」僧中1)

今(角徴)(大慈院本「涅槃講式」)

今(平上)(貞享版、元禄版「補忘記」)

の如くに、規範的なアクセント体系を示す「観智院本類聚名義抄」などの施点と一致していることの確かめられた謡曲の語彙を言い、詞の場合にはその総数が34例あることを示している。

一方の「誤」というのは、

かしこは(高砂、第三、5 べ、下段 9 行)

彼カシコ(「観智院本類聚名義抄」佛上 39)

のように、互いに施点に不一致をみせる謡曲の語彙を言い、詞の場合それが4例を数えるというわけである。また、詞の誤謬率10%とは、「観智院本類聚名義抄」などのアクセントを規範的なものと認めた上で、4例の全用例数34例に占める割合を百分比によって表わしたものである。

結果をみていくこととする。詞、それにカ、ル、文、サシ、クドキ、キリの各節まわしにあつては、相対的ながら他の節まわしよりも誤謬率が低く、現実のアクセントをより正しく反映する傾向にあるように思われる。ところが、これを資料2に示す「古今訓点抄」での同様の調査結果11.7%という低い誤謬率と比べて、この精度に相当する節まわしを挙げることになれば、更に限定され、僅かに詞、それにカ、ル、クドキの二つの節まわしを残すだけとなり、三者については特定の曲目に限って殊に乱れの著しいというような片寄りもないことは心強い。たゞ、三者の10%を遠く越えない誤謬率も、アクセント資料というこ

とでは高すぎるのではないかという疑問を呈する向きもあることと思う。しかし、今日、平安末、鎌倉期のアクセント資料として専ら活用に供されている『観智院本類聚名義抄』の場合にしてからが、例えば、

象キサ(佛下末29)、象キサ(僧下108)

の如き、本来「去上」とあるべき「象」に「入上」との声点が生かされているような、和訓のアクセントの乱れの散見される事は周知の如くであり、そして金田一氏の紹介になる「四座講式の研究」(三省堂)に収められた、「四座講式」の語彙総覧に於いても、

(a)文明本・永正本以下の本で(一) (一)の墨譜やその変種で表記されている語彙。

(b)文明本・永正本以下の本の《中音》の部分に用いられ、全部の拍を(一)の譜で表記されている語。

(c)名詞や動詞のような自立語が、密接な関係をもつ他の文節のあとに来て、(一)ばかりあるいは(一)と(二)ばかりの組合わせという型に表記されている語。

(d)アクセントが隠れた文節に用いられている助詞・助動詞に該当するものは予め省かれてあり、仮に除かず一律に採録したとすれば、10%を下らぬ誤譯率は避けられないものと思われる。ここでは先の「古今訓点抄」の誤譯率さえも17%を示すというところを、併せて考えておくべきだと思うのである。「古今訓点抄」、「観智院本類聚名義抄」、「四座講式」をアクセント資料として取り上げる以上は、謡曲譜本中の詞、それにカル、クドキの二つの節まわしについても、同様にアクセント

資料として取り上げられてしかるべきではないかと思うのである。

次に、②の、アクセント資料としての等質性を測る上で、再び、三度と繰り返しあらわれてくる同一の表現内容について、その施された胡麻譜に一定性がみられるか否か、という点については如何かというに、それは資料3に示すごとくである。このうち、「同じように施されている組み合わせ」とは、

櫻の(田村、第四、15べ、下段13行)

櫻の(田村、第四、19べ、上段6行)

を1組とし、1例増加することに2組、3組と計算したもので、

「混乱して一様でない組み合わせ」についても、

春の空(田村、第四、15べ、上段13行)

春のそら(田村、第四、15べ、下段14行)

を1組とし、以下同様に処理したものである。

これによれば、詞、それにカル、文、クドキは相対的ながら他の節まわしよりも誤譯率が低く、またそれは、資料4に示してある「古今訓点抄」の同様の調査での誤譯率10.7%や、「御巫本日本書紀私記」の16.9%に比べても遜色なく、施点の一定している点において聊かも見劣りするものではない。

以上①、②に関する調査結果を総合して明きらかなることには、現行謡曲によっても語るように謡う詞、名ノリが、現実のアクセントを最も忠実に反映している部分として認められるとの子見の如く、多くは胡麻譜が施されていないにもかかわらず詞のうちの胡麻譜のあるものについては、現実のアクセントを反映しているとみられる。また、掛ヶ合問答の名に由来するか

と思われるカ、ル、「平曲」での口説に相当すると見られるクドキなどの旋律は、近世初頭の現実の京阪アクセントを反映しているといふことができるのに対し、文(ふみ)は用例数が乏しく、②の調査において示された数値についても、クドキの場合と同じく誤謬率0%を示してはいても、①の調査で示された結果がや、思わしくないため、それとの兼ね合いから今は結論を留保するの他はない。また、「音曲玉淵集」(五)に「一口ずつ切りて謡ふが切り拍子なり。文字の次第續くに依りて拍子には乗らずして早きなり。」と説明されるキリについても、②に関する資料が著しく少ないため、なお検討を要すると思われる。しかしながら、その他の次第、上哥、下哥、ロンギ、クセマイ、上ハ、一セイ、ワカの各節まわしについては、①、②いずれの調査結果よりしても、アクセント資料として採り難い。なお、「平曲」における指声に相当し、「舌の扱ひ軽くして額のうち・鼻筋の通りにて息を切り……(中略)、文字運び鮮かに、句切・息次忙しからず、延やかに謡ふ」(「音曲玉淵集」(五))「サシと、論議書としての「補忘記」に相当し、「曲舞よりは引き立て、陽に謡ふ」(「音曲玉淵集」(五))「ロンギが、いずれも謡曲の場合、アクセント資料としてや、信頼性に欠ける傾向をみせていることにも併せて注意を払っておきたいと思ふ。

この項の終りに、藤田氏に指摘のあった、謡曲のどの部分かより現実の京阪アクセントを反映しない傾向にあるかという点についての結論のうち、

(1) 現行謡曲で拍子に合う部分(合わぬ部分よりも)がそうであるという結論については、筆者の見解は聊か異なるものであることを明きらかにしておきたい。

拍子に合う、合わないというのは、拍子に乗る、乗らないなどともいわれるもので、それぞれ「声明」の類でいわれる「歌う声明」、「読む声明」の名に相当するものと思われる。さて、「光悦本謡曲百番」を調査の対象とする場合、拍子に合う部分の方が合わないと総称される部分全般よりも、現実の京阪アクセントを反映しないという言い方は、厳密に言えば適當ではないと考えている。確かに拍子に合う部分が、キリの場合を保留すれば、哥の類(定格句)、クセの類(破格句)の別なく、いずれも現実の京阪アクセントを反映しない傾向にあるという点については異論はない。しかしながら、氏のいわれる如く拍子に合わないと総称される節まわし全般が、揃って皆な現実のアクセントを反映している節まわしといえるかというに、それは否定的といふべきである。周知の如く、拍子に合わないと言われる節まわしには、一セイ、ワカ、上ノ詠、下ノ詠などの詠吟風の詠の類と、サシ、文、クドキ、ノット、掛ヶ合(注15)などの叙唱風のサシの類との二種の区別があり、この区別が今の場合有意義的なものであることを思う。それは、詠の類に属する一セイワカが、①、②の調査のいずれにおいても高い誤謬率を示し、両者を現実の京阪アクセントを反映している節まわしとして認めることは難かしいということである。つまり、同じく拍子に合わない節まわしといっても、近世初頭の京阪アクセントを概ね反映しているものとしては、たゞサシの類のみ挙げるべき

で、更に厳密を期して重複を恐れずに言うとするれば、「古今調点抄」、「御巫本日本書紀私記」などの、平安末、鎌倉期のアクセント資料との比較から、中でもカ、ル、クドキの二つを考うべきであろう。これは明きらかな傾向性といえるように思う。

なお、藤田氏に指摘のなかった詞についても、現実の京阪アクセントを反映したものとして認めるべきこと、それが「声明」でいう「語る声明」にあたるものであろうことなどを記しておきたいと思う。

各節まわしを一括して取り上げ、近世初頭のアクセント資料としての意義を考えた場合には、前述の如き結果を報告することができないかと思う。ところが、各節まわしの所々に、ハル、下などの特殊な節付きの施されている部分が見え、その様な節付きのある所の方が無い所よりも現実のアクセントを無視する傾向が強い、というのが、藤田氏の見解であった。この事の当否も確認されなければ、結果次第では筆者の前述の結論についても「注釈」が必要となるような事態を招来するかも知れない。また、前述の調査の際には、「上カ、ル、上同、上地、下キリ、下同」などの特殊な節まわしの指示のある部分については、異なる要素の混入ある事を考えて調査の対象から外し、後述ある事を約していたが、今、特殊な節まわしの指示のある部分におけるアクセントの反映の状態についても併せて見解を明らかにしておきたい。

まずは前者について、個々の例に検討を加え、結果を資料5に掲げておいた。数値の教える所に従えば、ハル、クル、下

引などの特殊な節付きのうち、特定のものに限って殊にアクセント無視の傾向が顕著であったり、反対に、アクセントの乱れとは無縁の節付きがあったりなどということはない。具体的にみれば、詞、それにカ、ル、文、サシ、クドキなどの節まわしにあっては、特殊な節付きの施されていること自体が、皆無か稀であり、しかも、縦えその様な節付きの施されている場合でも、その部分において現実のアクセントが無視されるという傾向は少なく、わけても、文、クドキ両者の場合にはその感が深い。ところが、次第などの拍子に合わない詠の類や、クセマイ、一セイなどの拍子に合う節まわしの場合には一様ではない。例えば、クセマイ、上ハにおいて顕著なように、ハル、クル、下、引などの特殊な節付きの施されている所で、とりわけ現実のアクセントを無視する傾向の著しいものが一方にあり、上哥、ロンギにおいてのように、特殊な節付きのある部分でもアクセントの乱れが顔を出す例もあれば、現実のアクセントを正しく反映したりする例もあつたりという状態である。クセマイ、上ハは論外としても、上哥、ロンギの場合には、詞、カ、ル、文、サシ、クドキの類よりは、特殊な節付きとアクセントの乱れとの関連に密なものがあつても、決して特殊な節付きのあることが、現実のアクセントを無視する唯一の原因となつていて、というわけではないと思われる。つまり、特殊な節付きとアクセントを無視する傾向との関連は、個々の節まわしによつて差があり、一様には論ぜられないわけで、この点藤田氏の指摘になる(2)の見解とは異なつた結論をもつのである。

次いで後者の問題の場合。資料6は先に資料1を作成したと

同じ目的、手続きによって作ったもので、資料7もまた資料3と同じ。 「上カ、ル、上同、上地、下キリ、下同」などの特殊な節まわしの指示のみえる部分の、アクセント資料としての信頼性をこの資料6、7によって測ってみるに、いずれの場合も誤謬率が頗る高く、これらの特殊な節まわしの部分の旋律には、近世初頭の現実の京阪アクセントが余り反映しない傾向にあることを示して明快である。

最後に、藤田氏の第三の指摘、

(3)文の中(最初の部分よりも)

ほどの旋律が、現実のアクセントを比較的反映しない傾向にあるという点についても、や、疑問に感ずる所あり、検討を加えておきたいと思う。資料8は、現実のアクセントを反映していない各例が、ワキ、シテ、ツレ、地などの文章全体のどの辺りに位置しているものかを、各節まわしについてそれぞれ確かめてみたものである。まずカ、ルの場合、8の(イ)をみてみると、現実のアクセントを反映していない全例24例の中で、胡麻譜の施されたワキ、シテ、ツレ、地などの文、文章が、2行に満たないもの、中にあらわれる例が、半数の12例を数え、3行未満までの文、文章中における同様の例5例をも含めると17例に達し、24例のうちの75%が、3行に満たない短かい文、文章の中に集中的にあらわれているのごとくみえる、ところが、是に1行当りの頻度を考えることになれば、(イ)にみえるように、3行以上の長文、未満の短文、いずれも0.3個前後の同様の数値を示し、文、文章が長いものであるか、短かいものであるかの

区別に係わりなく均等であることを教えている。

ところで、藤田氏の指摘の可否を、文章の初め、中程、終りの各部分に最低限1行を必要と見做して、3行以上の長い文章について確かめてみることにしたが、是は飽くまでも一つの目安としての便宜的な措置である。まず詞の場合、現実のアクセントを反映しない4例は、初めの部分に3例、中程に1例、という状態で分布し、カ、ルもまた傾向として同じ。是によると、現実のアクセントを反映しない傾向は、共に文章の初めの部分に集中しているというべく、この点藤田氏の報告と異なる。文、サシ、クドキの場合には、2行にも満たない短かい文、文章なるものがなく、「長い文章よりも短かい文章に現実のアクセントを反映しない傾向が顕著にあらわれるものか否か」は明らかにしえないが、たゞ、長い文章中においては、詞、カ、ルの場合と異なり、文章の初め、中程、終りに均等にあらわれ僅かにクドキの場合に初めの部分に少ないというばかりである。その他、上哥、キリ、クセマイ、上ハなどの節まわしの場合にも、何れか一方への片寄りという事のない点同前であるが、残る、次第、下哥、ロンギ、一セイ、ワカについては、3行以上にわたる長い文章が見出せず、この点判じ難い。

(三) おわりに

以上筆者は、謡曲の旋律の上に反映しているアクセントの実際を把握することに努め、アクセント資料としての価値を吟味してきた。その結果まず、譜本中の詞、次に各節まわしのうちカ、ル、文、サシ、クドキなどの拍子に合わない吟唱風の小段

「サシの類」、とりわけカ、ル、クドキの両者、以上三者は、「補忘記」、「平曲」などのアクセント資料に伍して、有力なアクセント資料として活用し供する事が可能であること、その際に、ハル、クル、下、引などの特殊な節付きの有る無しには係わらないこと、また、長、短二様の文、文章の有り様をもつか、ルの場合にも、その、長、短とアクセントの反映度との関連を云々することは不要であること、唯、3行以上の長文にあつて、初め、中程、終りの各部分の何れかにアクセントの乱れが集中的にあらわれることもないところから、現実の京阪アクセントを反映した資料としての信頼性が、詞、それにカ、ル、クドキの旋律全般にわたつて高いと考えたのである。

ちなみに今、用例の豊富なカ、ルの部分を取り上げて、アクセント資料としての見通しをたてる見地から、二音節名詞第二類、第三類、第四類に焦点を当てた場合、

分類	下接する助詞	
	ハ・ガ・ニ・ヲ	ノ
第二類	● ○ ▼	● ○ ▼
第三類	● ○ ▼	● ● ● ● ▼ ▼
第四類	○ ● ▼	○ ○ ● ● ▼ ▼

●、○は高音、低音 ▼、▽は助詞の高音、低音をそれぞれ表わす。

となつており、ここには中世、近世語アクセントの代表的な傾向と目される、第二類と第三類の合併の事実をみてとれるし、

また「平曲」においてみられた(奥村氏「前掲論文」参照)、助詞「の」の下接する場合の上接第三類名詞の高平(平板化、第四類名詞に助詞「の」の下接した場合、相拮抗するが、傾向としてや、○●▼の型が多くみられ、「平曲」にみえる○●▼より新しい型を示しているなど、詳しい報告の待たれる所以である。

この度の報告においては、同時期の他の観世流諸本との比較、他流派の諸本での状態の検討にまでも言及するという見地や、天正・慶長・寛永年間を経て今日にまで至る諸本の、史的研究という見地は導入せずして、「光悦本謡曲百番」にみる」という限定を自づと設けているところから、その不十分を承知している積りであり、後日に然かるべき稿を整えたいと思う。

註1、桜井氏の論文には他に、若干の節付き(例えばアタリ)が現実のアクセントを反映したものであるなどの記述もある。

2、日本古典全集刊行會版「光悦本謡曲百番」解説、日本古典文学刊行會版「光悦うたひ本」の中の「東洋文庫蔵光悦謡本解題」など参照。また、節付きの種類が後世の稽古本などに比べ少ないことも、この事実を教えている。

3、強吟、弱吟などの吟別の登場に伴つて、吟唱様式も数に限りのあるパターンにまとめられ、胡麻譜に必ずしも忠実には唱えない傾向が顕著となつている。

4、嘘へば、大をいぬと云は京声也(「金春十七部集」所収)

5、胡麻譜の他に、ハル、当(アタリ)などの節付きをも含めていう。

6、金田一氏の報告になる「四座講式の研究」(三省堂)所載の、

- 『四座講式』で墨譜を施されている語彙総覧』に依って確認する。
- 7、その他に、三音節名詞第四類の第二類への、第五類の第三類への合併、助詞「の」を下接した際の、二音節名詞第三類、三音節名詞第四類の高平(平板)化現象、低起式動詞のうち、未然、連用、終止形に、特定の助詞・助動詞が接続する場合の高起化の現象など。
- 8、「平曲譜本に反映したアクセント―京大本平曲正節を中心として―」(『國語と國文學』昭和45年10月特輯号)、「アクセント史料として見た平曲譜本」(九州大学『文學研究』第69輯)
- 9、()で囲んだ数値は、
うるほふ(羽衣、第三 110 べ、上段 13 行)
の如く、『補忘記』に「上上平平」と出ている、その下降部分(上上平)までは、現実のアクセントを正しく反映しているとみられるものである。謡曲に好んで用いられた旋律であろう、少くはない。
- 10、前田富祺氏の「世尊寺本字鏡の成立―新撰字鏡」と「類聚名義抄」との比較において―(『本邦辞書史論叢』昭和42年2月)
- 11、『四座講式の研究』(三省堂) 204、205 べ。
- 12、「類聚名義抄和訓に施されたる聲符に就て」(『國語學論集』(『岩波書店』)に金田一氏、「語調史料としての類聚名義抄」(『東京教育大学文学部紀要』第九輯)に小松英雄氏の論考がある。
- 13、但し、
大悲の(田村、第四、15 べ、下段 6 行)
大悲の(田村、第四、15 べ、下段 8 行)
大悲の(田村、第四、19 べ、上段 13 行)
のように、同じ様に施されている組み合わせと、混乱して施譜の一樣でない組み合わせとが共にある時、差引等とはせず混乱した施譜のあることの方を重視して、混乱して一樣でない組み合わせの 0.5

資料 1

『観智院本類聚名義抄』「四座講式」「補忘記」「平曲」のアクセント体系との比較

詞		曲目	
		節まわし	曲目
誤	正		
0	4	船 弁 慶	
1	7	自然居士	
0	1	融	
0	5	報 生 石	
0	3	善 界	
1	7	柏 崎	
2	4 (1)	三 井 寺	
0	3	西 行 桜	
4	34 (1)	総 計	
10.5 (10.2)		誤譯率	%

×は未調査 / は用例なし

- として扱った。
- 14、「謡曲集上」(『日本古典文學大系』)解説 15 べ参照。
- 15、掛け合は、観世流譜本にみえるカ、ルと同一である。
- 16、節付きの「下」と、節まわしの「下」とを区別して用いる。
- 17、クセマイに属する節まわしであるが、高い音が中心となる第三節を取り出して、低い音中心の第一、第二節のクマセイと区別して扱った。

クドキ		節まわし 曲目
誤	正	
1	6	善知鳥
3	20	富士太鼓
4	23	隅田川
X		
8	49	総計
14.0		誤譯率

サシ		文		カ、ル		節まわし 曲目
誤	正	誤	正	誤	正	
7	35 (2)	X		3	34 (3)	高砂
5	24 (3)			4	29	田村
11	13 (4)	X		1	29 (5)	羽衣
6	21 (5)			2	25 (9)	船弁慶
10	47 (3)	X		8	33 (5)	八島
7	21 (3)			11	45	5
12	27 (4)	X		1	15 (1)	當麻
X				5	12	X
		58	188 (24)	16	57	
23.1 (21.1)		21.9		11.5 (10.2)		誤譯率 %

キリ		節まわし 曲目
誤	正	
0	7	高砂
5	7 (1)	當麻
0	1	熊野
2	14	源氏供養
2	9	善知鳥
3	20	志賀
6	14	融
18	72 (1)	総計
20.0 (19.7)		誤譯率

ロンギ		下哥		上哥		次第		節まわし 曲目
誤	正	誤	正	誤	正	誤	正	
8	20 (3)	5	2	13 (2)	16 (2)	2	2 (1)	高砂
3	9	0	2	13	20 (1)	2	2	田村
X		2	1 (1)	8	19 (2)	0	0	羽衣
		2	3	6	6 (2)	2	2 (1)	船弁慶
6	3	2	1	14	18 (1)	3	1	八島
X		1	3	15	22 (2)	1	4	熊野
		3	6	3	2	17	21 (1)	4
X		1	0	X		1	0 (1)	小袖曾我
		7	8 (1)			2	3	源氏供養
27	49 (4)	16	14 (1)	86 (2)	122 (1)	17	22 (3)	総計
35.5 (33.7)		53.3 (51.6)		41.3 (39.8)		43.6 (40.5)		誤譯率

クセの類

上ハ		クセマイ		節まわし 曲目
誤	正	誤	正	
7	2 (2)	8	18 (3)	高砂
		7	7	田村
4	2	14	16 (1)	羽衣
		9	7	船弁慶
3	3	16	8 (2)	八島
12	3	10	17	熊野
1	4	12	10	當麻
8	5 (1)			小袖曾我
3	8			源氏供養
38	27 (3)	76	83 (6)	總計
58.4 (55.8)		47.1 (46.0)		誤謬率

詠の類

ワカ		一セイ		節まわし 曲目
誤	正	誤	正	
		5	2 (1)	高砂
		3	0	田村
3	7	2	1	羽衣
0	1 (1)			船弁慶
		3	3	八島
				熊野
		3	1 (1)	當麻
				小袖曾我
		3	4	源氏供養
2	1 (1)			楊貴妃
7	7 (1)			難波
12	16 (3)	19	11 (2)	總計
42.7 (38.7)		63.3 (59.3)		誤謬率

資料 2

古今調点抄

誤正 29/218

誤謬率

11.7%

「古今調点抄」は「古典保存會版」による。

資料 3

繰り返しあらわれる同一の表現内容に対してどの様に胡麻諾が施されているか。

誤謬率 %	事 項		節まわし
	詞	カ、ル	
0	0	1	詞
15.1	5	28	カ、ル
0	0	4	文
31.5	9.5	22	サシ
0	0	4	クドキ
60	3	2	次第
65.9	15.5	8	上哥
	0	0	下哥
33.3	4	8	ロンギ
66.6	1	0.5	キリセイ
100	5.5	0	クマ
	0	0	上ハ
100	1	0	一セイ
	0	0	ワカ

資料 4

誤謬率 %	事 項		古今調点抄
	アクセント資料	御巫本日本書紀私記	
10.7	12	100	古今調点抄
16.9	40	235.5	御巫本日本書紀私記

資料 5

ハル、下等の特殊な節付きの施されている部分でのアクセントの反映の状態

「御巫本日本書紀私記」は「古典保存會版」による。

事 項	節まわし	
	アクセントの乱	いものあらわれ
詞	0 4	0 34
カ、ル	2 24	5 184
文	0 16	5 57
サシ	4 58	8 188
クドキ	0 8	3 49
次第	1 17	1 22
上哥	13 86	16 122
下哥	1 16	0 14
ロンギ	3 27	4 49
キリセイ	1 18	2 72
クマ	7 76	1 83
上ハ	8 38	1 27
一セイ	2 19	2 11
ワカ	1 12	1 16

(右下の細字は全用例数)

資料6

上、上同、上地などの指示のある部分のアクセントの状態

ワ		カ		一セイ		クセマイ		キ		リ		ロンギ		次		第		カ、ル		節まわし 曲目
誤	正	誤	正	誤	正	誤	正	誤	正	誤	正	誤	正	誤	正	誤	正	誤	正	
						9	13	2	4 ⁽²⁾	1	6			7	6					高砂
						6	9					4	6			4	12 ⁽³⁾			田村
0	2					6	15 ⁽¹⁾	9	13					1	2	4	3			羽衣
						6	5									12	18 ⁽⁴⁾			船弁慶
						2	7 ⁽¹⁾	10	17	6	14 ⁽¹⁾					13	18 ⁽²⁾			八島
						5	6									4	8 ⁽³⁾			熊野
						4	13			2	8					8	9			當麻
																				小袖曾我
		2	1							0	4									源氏供養
0	2	2	1	38	68 ⁽²⁾	21	34 ⁽²⁾	13	38 ⁽¹⁾	1	2	49	83 ⁽¹²⁾							総計
0		66.6		35.8 (35.2)		38.1 (36.8)		25.5 (25.0)		33.3		37.1 (34.0)								誤譯率

下、下同、下地などの指示のある部分のアクセントの状態

ワ		カ		一セイ		クセマイ		キ		リ		ロンギ		カ、ル		節まわし 曲目
誤	正	誤	正	誤	正	誤	正	誤	正	誤	正	誤	正	誤	正	
																高砂
												3	9	8	15 ⁽³⁾	田村
														2	6	羽衣
5	10 ⁽¹⁾					1	1							3	3	船弁慶
		0	3					3	9					0	3	八島
														0	4 ⁽¹⁾	熊野
		1	1									10	15			當麻
																小袖曾我
																源氏供養
5	10 ⁽¹⁾	1	4	1	1	3	9	13	24	13	30 ⁽⁴⁾					総計
33.3 (31.2)		20.0		50.0		25.0		35.1		30.2 (27.6)						誤譯率

資料7

上、上同、上地、下、下同、下地などの指示のある部分において、繰り返しあらわれる同一の表現形態に対してどの様に胡麻譜が施されているか。

誤譯率	事項		例数	行数	1行当りの頻度
	カ、ル	次第			
36.3	4	7	12	約52	約0.32
23.0	1.5	5			
50.0	2	2			
75.0	3	1			
	0	0			
100	0	2			

資料8
(カ、ル)

事項		例数	行数	1行当りの頻度
カ、ル	次第			
3	4	5	12	約0.32
約21	約52			
約0.32	約0.32			

(ロ) 3行以上の長い文章における誤まりの例の分布状態

終りの部分	中に	に	部分	節
に	に	に	に	に
0	1	3	詞	ル
2	1	4	カ、	ル
5	5	3	文	シ
15	10	12	サ	キ
2	4	0	ク	第
0	0	0	次	哥
25	25	33	上	哥
0	0	2	下	ギ
3	3	4	ロ	リ
4	3	3	キ	マイ
25	27	28	ク	ハ
11	7	11	上	セ
0	0	0	一	イ
1	0	2	ワ	カ

受贈雑誌 47年4月〜9月 ②

- アカデミア(南山大) 86/東海学園国語国文(東海学園女子短大) 3/淑徳国文(愛知淑徳短大) 13/金沢大学文学部論集 19/金沢大学教養部論集 9/富山大学教育学部紀要 20/国語国文(京都大) 41巻3〜8/外国文学研究(同志社大) 3/研究会報(同志社大) 4/人文学(同志社大) 122/龍谷大学論集 399/女子大國文(京都女子大) 65/山辺道(天理大) 17/高野山大学国語国文1/待兼山論叢(大阪大) 5/研究紀要(大阪大) 4/研究集録(大阪大教養) 20/学大國文(大阪教育大) 15/人文研究(大阪市立大) 22巻11分冊、23巻2分冊/文学史研究(大阪市立大) 13/殖生野國文(四天王寺女子大) 2/大阪城南女子短大研究紀要 7/武庫川國文 4/人文論究(関西学院大) 22巻1/日本文芸研究(関西学院大) 24巻1/神戸外大論叢 22巻4〜6/研究紀要(甲南女子大) 8/甲南國文(甲南女子大) 19/文林(松蔭女子学院大) 6/親和國文(親和女子大) 5/広島大学文学部紀要 30 31特輯 2号/中世文芸(広島大) 50前集/国語学攷(広島大) 59/国語国文学誌(広島女学院大) 1/島根大学文学部紀要 5/島大國文(島根大) 1/愛媛大学文学部論集 4/愛媛國文と教育 4/高知大國文 3/山口女子短期大学研究報告 26/香椎潟(福岡女子大) 17/国語国文学研究(熊本大) 7/国際大学国文学(沖縄国際大) 4/九州大学史研究所紀要 17/文学論叢(九大教養) 19